

治水・利水・環境・維持管理の課題

治水の課題

項目	課題
人口（資産）集中	釧路川水系の想定氾濫区域のうち、資産の約90%が、下流域の低平地に集中しているため、ひとたび大きな出水により氾濫が生じると、その被害が大きなものとなる。
河道断面積	オソベツ川合流点上流区間など、洪水の流下に必要な河道断面積の小さい区間は、洪水時水位上昇による外水氾濫の危険性が高い状況にある。
河道内樹木	オソベツ川合流点上流区間など、河道内に洪水の流下に支障となる樹木の多く繁茂している区間は、洪水時水位上昇による外水氾濫の危険性が高い状況にある。
堤防	オソベツ川合流点上流区間など、氾濫防止上堤防を必要とする区間の約4割が、無堤もしくは暫定堤である。この区間は、洪水時において浸水および越水・漏水等による破堤の危険性が高い状況にある。
内水排除	釧路川水系における樋門樋管の1割強が、排水能力不足や老朽化など治水上の機能に不備がある。この地点では、内水氾濫の拡大や、老朽樋門樋管部が堤防の弱点となり破堤の原因になりやすいなどの状況にある。
河岸浸食	オソベツ川合流点上流区間など、蛇行部の水衝部など河岸の浸食を受けやすい区間は、堤防崩壊などによる洪水被害の拡大しやすい状況にある。釧路川水系における河岸浸食対策としての護岸整備は、事業区間河岸延長の約2割に対して実施している。
河床の安定	河口付近の河床上昇やオソベツ川上流区間の河床低下（最大で2.3m/10年のペースで低下した区間あり）など、河床高の経年変化が確認されている。河床高の経年変化については、河床低下が過度に進んだ場合は河川構造物の基礎部洗掘による崩壊の危険性が高まり、河床堆積が過度に進んだ場合は流下能力不足をきたすなどといった問題を生じさせる。
橋梁	釧路川水系において、洪水流のスムーズな流下のために定めた規格に準拠していない橋梁が7箇所存在する。規格外橋梁の上流側一定区間ではその影響を受け、洪水時の水位上昇による外水氾濫の危険性が高い状況にある。

治水に関する各委員の意見等の検討方針

各委員の意見等	検討方針(案)
<ul style="list-style-type: none"> ふるさとの川の下流部分の治水に関しては、降雨によって川が氾濫するという事は千年経っても無いと思うが、高潮と津波に対する対策については、全く無防備だと思う。近年、未だ町も冠水しているため、この高潮を十分考慮して部会等で検討して欲しい。 岩保木から下流は、干潮、満潮によって川が逆流する感潮水域となっているので、観光を考える面でも、そういうことを十分考慮に入れて欲しい。 釧路川の治水の特性については、他の地域との比較等で見えていくことによって、より浮かび上がってくるという部分もあるのではないかと。データ的には整理しづらいところもあると思うが、わかりやすく情報整理をして欲しい。 護岸のコンクリート3面張りや、生物生息上の観点からも望ましくないで、近自然工法という形で考えてもらいたい。 護岸の必要なところはかなり危険なのか。必要性について基準があるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在実施中の釧路川改修工事では、既往最大である十勝沖地震の津波を考慮して築堤高を決めており、一部では施工を完了している。 今後の作成時に他河川と比較できるものはできる限り行うこととする。 今後ランドデザインの検討などをふまえて、自然環境を考慮した近自然工法を取り入れていきたい。 護岸の必要な箇所は、堤防が危険となる箇所、河岸侵食の可能性が高いところが主な箇所である。基準としては堤防の危険性から判断した河岸防護ラインを設定し、必要に応じて護岸を行うこととしている。

環境の課題

項目	課題
貴重な動植物の保全	釧路川流域では特別天然記念物のタンチョウをはじめ、多くの貴重な動植物種が確認されている。これら貴重な動植物種については、生息環境の保全を考慮しなければならない。
生物の生息・生育環境の維持	動植物の生育・生息環境の保全を考慮する必要があり、河跡湖や旧河道は、水生植物やトンボ類の重要な生息環境となっている。
湿原の保全と再生	釧路湿原では、ハンノキ林の拡大、土砂流入、農業排水など多くの問題を抱える。現在、湿原の保全・再生のための対策として、具体的な目標を掲げ、各地に調査地を設けて各種試験・調査が行われている。
漁業資源である魚類の保全	釧路川流域ではサケ・マス、シヤマノなどを対象に増殖事業が実施されていることから、これらの魚類に配慮する必要がある。また、釧路市及び釧路町周辺、標茶町の塘路湖及びシラルト口湖では内水面共同漁業権が設定されており配慮が必要である。
親水空間の創出	地域住民の理解は、釧路湿原の良好な河川環境づくりには不可欠な事である。更なる地域住民による活動の支援や、河川とつきあう場を構築する必要がある。また、近年、カヌー等で釧路川流域を利用する人が増加しており、環境に対する負荷が心配される。下流域では、親水空間の整備が求められている。
水環境の保全	近年、湿原流域の水質は全窒素が増加傾向にある。そのため、水環境を保全するためには窒素負荷量の削減が必要である。また、地下水は湿原の生態系と密接な関係があるにもかかわらず、その状況についての資料はほとんど整備されていない。

環境に関する各委員の意見等の検討方針

各委員の意見等	検討方針(案)
<ul style="list-style-type: none"> 岩保木水門は、港湾に土砂が流入するという事で閉めて運河を造ったが、80年経過した中で、あの区域で1つの自然体というものが形成され、貴重なイトウなどの生物についても、それなりの自然環境の中で形成されていることも十分考慮して検討して欲しい。 上流部の方の本流、それからまた支流部分についても、落差工に魚道の整備をしてサケ科の魚が遡上できるようにして欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 整備計画原案を作成する中で検討すべき課題であり、今後、流域委員会の中で議論する。 今後、整備計画原案を検討していく中で、必要に応じて魚道設置についても考慮していくこととなる。なお、現時点で支川については調査したところ、落差工は9箇所あるがそのうち8箇所については魚道を設置済みであり、最栄利別川の1箇所については、15年度以降（15年度予算要望中）に施工予定である。 今後、具体的な検討を進めていく中で、考慮していく。
<ul style="list-style-type: none"> 森林の現状を見ると、昭和20年代から比べると、大きく変化している状況になっている。当然、森林・河岸についての課題も1つの視点として取り入れる必要がある。魚道については、魚道が設置され、魚は通過しやすくなっても、繁殖する場所がなかったらどうしようもない。川としての機能を維持しているのを見なければならぬ。魚は通るが上らない魚道ができないように考えていかなければならない。 環境に係る流域区分として、土地利用が進んでいる標茶町、弟子屈町の地域と自然河道が残されている弟子屈町上流区域は、分けて考えた方が良いのではないかと。 中流区域の動植物に関するデータは、ほとんどが湿原に関するものであり、湿原の後背区域や山間区域などの湿原を支えるエリアの情報が少ない。 	

利水の課題

項目	課題
水量	<ul style="list-style-type: none"> 屈斜路湖の、釧路川における天然の貯留施設としての機能を維持し、現状の水量の維持、保全に努める。 釧路湿原の保全に係る各種データを蓄積するとともに、河川流量との関連性の把握に努める。 また、釧路湿原の、釧路川における天然の遊水地施設としての機能を維持し、現状の水量の維持、保全に努める。
水質	<ul style="list-style-type: none"> 釧路湿原の保全に係る各種データを蓄積するとともに、河川水質との関連性の把握に努める。 中、上流域において悪化の傾向が認められる項目（BOD、大腸菌群数）について調査、検討し、水質改善に努める。
水利用	<ul style="list-style-type: none"> 将来における水需要の可能性を把握する。 漁業権対象魚種（を含めた釧路川水系に依存する動植物）の生息、生育のため、河川に必要な流量の維持、保全に努める。 カヌーを含めた舟運利用が行われているため、その利用の妨げにならない河川に必要な流量の維持、保全に努める。

利水に関する各委員の意見等の検討方針

各委員の意見等	検討方針(案)
<ul style="list-style-type: none"> ふるさとの川整備計画では、主として河岸の整備ということになると思うが、現状の釧路川の下流部というのはBODが相当高く非常に水質が悪いので、河岸整備に当たっては、まずそういう水質をどうしようかというふうな浄化していくのか、また、上流からの問題もあわせて考える必要があるのではないかと。魚が住めないような水質では河岸の船着き場や釣り場を設置しても役に立たないので、未長く有効に活用できるような整備の仕方を考えて欲しい。 幣舞橋の下の環境基準値は、E類型になっているが、このE類型というのは、最悪の状態の基準で、いわば実態的には規制から野放しになっている。道の委員会等でも、E類型をBあるいはCに格上げするよう要請しており、実際の水質はB類型に近い形になっていることから、この流域委員会の中でも取り上げて欲しい。 水質データは、湖沼、海はCODで河川はBODで測ることになっているが、湖沼のBODも出した方が、河川と比較する上で分かりやすいのではないかと。 流域土地利用計画等の経年変化を見ると、畑地、牧草地が相当増えており、化学的肥料の使用や、道路に大量に散布している融雪剤の塩化カルシウム等が河川に与える影響について憂慮している。 川の水質については詳しい資料があるが、釧路湿原の3つの大きな湖沼の水質についての資料がない。氾濫して水位が上昇したときに土砂などを大量に含んだ水が逆流して、ため池になって沈泥が起きている。達古武沼は、SSやヘドロ状の堆積物が非常に増えているという報告もあり、湖沼の水質については、しっかり見る必要があるのではないかと。 正常流量の考え方、河口閉塞について心配している。上流の土地利用で牧草地が年々開拓され、保水力が全体的になくなってきているということが言えるのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> 類型見直しに関し、北海道（環境生活部環境保全課）では、平成6年環境庁通知に基づき、現在の水質が水域類型の上位の類型に係る基準値を達成し、この状態が継続している水域については、現在、全道的に見直しを進めているところである。 BODを観測している湖沼もあるが、現在、湖沼はCODで評価されているため、屈斜路湖ではBODの観測を行っていない。 水質については、地域の関係機関と連携をとり検討していく。 釧路川流域の化学肥料の使用状況と道路の融雪剤の散布状況を示した。 出水時の湖沼への土砂の影響についても現況把握を行い、必要に応じて今後対策検討を行っていく。 湖沼の水質について今後整理する。 釧路市水道部の水質測定位置と近年の状況を示した。 河口閉塞の発生はいままで起きていないが、河口砂洲の変化に十分注意していく。 保水力は道内他河川と比較しても河川流況が良い特徴があるが、土地利用との関連性についても今後考慮して対応していく。

維持管理の課題

項目	課題
堤防の維持管理	堤防の除草は年1~2回行っているが、除草による刈り取った草の処分方法に苦慮している状況である。
樋門樋管等の維持管理	樋門樋管の多くが現地での操作となっており、遠隔操作などの迅速な対応ができないこと、操作員の高齢化が進んでおり要員の確保が難しくなっている状況である。また、一部老朽化した施設の改善に多くの費用が必要となっている。
国土保全管理情報の収集提供システム	水文データ等の数値情報はリアルタイムで収集を行っているが、河川管理の監視の省力化、災害時等の迅速な情報伝達のための河川状況を画像にてリアルタイムで入手できるシステムは、現在、新釧路川の11kmのみが整備されている状況である。
広域防災機能	関係自治体と連携し、河川敷の避難空間、地域防災活動拠点、樹林帯等の整備を行っていく必要がある。
情報提供体制	河川情報を一般の人々にこれまで以上に分かりやすい形式で提供し、水防・警戒避難及び復旧のために即時対応システムの構築や災害時の避難場所等を記載した「洪水ハザードマップ」の作成・普及が求められている。
流水の正常な機能の維持管理	釧路川の水質保全のために、河川へ流出してくる家畜糞尿対策として、浄化施設導入の指導や水質浄化作用をもつ樹林帯の整備が必要。水道水を釧路川から取水しているため水質事故が発生した場合、大きな被害となりうる。
河川環境と河川利用	バリアフリーとして容易に川に近づけるように整備した緩傾斜坂路（スロープ）や水洗トイレなどの諸施設等が求められている。不法占用、不法行為、ゴミの不法投棄が発生している。

維持管理に関する各委員の意見等の検討方針

各委員の意見等	検討方針(案)
<ul style="list-style-type: none"> 屈斜路湖は道の管理で、塘路湖や湿原内の湖沼は国が管理しているということであるが、釧路川水系の中で小さい河川を含めてどこが、どのように管理しているのかをわかるようにして欲しい。 河川管理の実態はなかなか見えにくく、管理の区分や管理の態様によっても異なっており、情報としてもなかなか明瞭な形で示すことが難しい部分だとは思いますが、地域の人に分かりやすいような形で情報の整理をして欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 管理区分図を作成する。